

風に揺れる芒

巢尾黒曜

幽霊の
正体見たり
枯尾花……



目次

序句	1
一日目	2
二日目	6
三日目	9
四日目	12
熱と時間	13
五日目	16
六日目	19
七日目	22
幽霊とは何か	23
八日目	26
九日目	29
幽霊の存在論	30
十日目	32
十一日目	34
結句	37
注意	40

序句

さて、人には往々にして語らねばならない経験といった様なものが、その生の内にて存在する。私も人の子である。汎(あら)ゆる規則や法則には例外というものが、然るべくして存するのであるが、此度、私はその法則の魔手から逃れ、例外と為るに能わなかった様だ。……故に、私は語らねばならない。己の、体験した出来事を、余すこと無く、全き、その遍く総体を。だが、私の身に巻き起こった一連の怪事を此処に語り尽くしたところで、それが読者諸賢にとっての信に至るか否かについては、私の考定の範疇の埒外に存する事項である。しかし、これを私は、この茹(う)だる様な夏の煩熱の内に一今年は冷夏の様でもあったが一確かに享受したのだ。少なくとも、私のこれから記述する本稿の内には、幾分の潤色と虚構が、幽鬼が如くに竄入(さんにゅう)することも、あろう。けれども、それらは一様に私の往時に於ける内的現実の残影を反響させたものとして、是非とも御寛恕いただきたい。実の所、私も、これ程までに奇怪で、不可思議で、到底、信ずるに出来ないであろう体験を為したのは、首途のことであり、この様な事実の一群を、一体如何様にして述べ、そして記すべきか、猶予(いざよ)い、狐疑し、逡巡(しゅんじゅん)しているのである。だが、私がどの様な方途を取るものであれ、この出来事は、その全てを尽く記述されなければならない。その様な心持ちにて、私は筆を取る。何故、私がこれ程までに躊躇っているのか、不審に思われる向きも、中には居られることであろう。しかし、私の記す、次の一節にて、私の躊躇と抱かれる不審の根源は、全く明瞭に把握される筈である。それは……こうだ。

私には、十一日間のみ、幽霊が見えた。

そう、私が今より筆を加えようか否かと、逡巡しているこの文書は、面妖で物怪(もつけ)じみた、正しく二つの意に於いて「幽妙」な、十一日間の記録である。

一日目

事の始まりは、鬱屈と怠惰の領する、とある盛夏の一日であった。私はおそらくその当時の日の昇りから考えるに、丁度正午に程近い時刻に、両眼を覆う緞帳(どんちょう)を、億劫(おっくう)ながらも大儀そうに、物々しく上げたのである。すると、私の眼前に、知りもしない女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体(もったい)をつけつつ、其処に在ったのであった。さて、濡羽(ぬれば)の長髪を有した女の顔貌は非常に良く整っており—しかし、唇は蛭の様であった、という直喩は当たらないが一衆目を介すれば、それは正しく、美人と類されるものであった。そして、眼を下に遣ると、女は白い衣服—私の思うに、ワンピースというものであろう—を着用しており、其処から、細腕、白魚の五指と、半ば此方が窺視している様な、そんな背徳的で蠱惑(こわく)的な心持ちとなる、幽艶(ゆうえん)な美を湛える素足が、覗くのであった。年の頃はおそらく二十歳か、それを少々越した程に思われた。とはいえ、私にとって、そう思えた、と言う程のことでしか無い、ということも全く真である。私にとって、この寝ぼけ眼の面前に存する女は全く嬋媛(せんえん)であるが、何処か薄幸でありそうな、その様な人物であるかの様に、思われた。つまり、眼を遣れば、見惚れる程の、美人であった、という訳だ。だが、この女の容貌に気を取られるのは、全く贅言を要さぬ程、私には尋常の事であるようにも思われたのではあるが、此処に於いて、何故かは知らないが、私の内に、違和の念が、亀裂から垂下する清水が如くに湧き、残余する鈍重な眼痛が如くに、私に憑いて離れぬのであった。……そう、全く、その違和感は、私に憑いて離れなかったのだ。丁度、何かに、譬えば、幽霊に、憑かれたかの様に……。

私は其処に至り、己の違和の念の本色を得たのであった。私がこの女に抱いている不和の念は、私が共寝する関係の女を有しないことでも、この女の顔貌を見知らぬことでも、況(ま)して、私の枕下を女が暗き晦冥(かいめい)でも覗き見るかの様に凝望していることでも、無かったのだ。寧(むし)ろ、それらよりも前に、存することであった。私の知る限りに於いて、生物というものは、およそ三つの領界に住まうものである。この三界というのは、当為のこととして、海、陸、空であるということには多く言を要しないだろう。そして、この内、海には魚等の海の獣どもが、陸には犬等の陸の獣どもが、空には鳥等の空の獣どもが、それぞれの領域をしろしめしているのである。更に、これらの生類は、それぞれの所領を互いに侵犯することなく一鳥が陸に降り立つ例も有るが、どの様な規則にも例外は存する—その生を全うすることとなる。即ち、鰺は陸を以て暮らすこと無く、柴犬は空を以て暮らすこと無く、鴉は海を以て暮らすことが無い、という訳だ。人間もその例に漏れず、陸の有情として日々を思い暮らしているのであり、事実、私も、陸の成員としてその生活の大半を、定めとして受け入れ、謳歌している。……

そもそも、全く奇幻なものではないか。私は横臥している。女の面目は、私の眼前に存し、私は眼下を見ることにより、女の母趾に至るまで、垣間見るに能う。……平時であれば、臥している私が、少なくとも直立した人間の全身を認識するのであれば、おそらくその身を起こさねばならないだろう。しかし、現にその当時に於いて、私は大殿(おおとの)に臥せった儘に於いて、女の全容を確認するに能ったのであった。即ち、女は陸に足をつけてなど、いないのだ。この場合、考えられることは、二つである。私が女と一夜を明かし、そして隣に女が寝ているか、或いは……女が……女が、「宙空に浮いているか」……だ。先にも述べた通りだが、私に後朝(きぬぎぬ)の別れを為す関係に在る女は、これは実に悲嘆に暮れるべきである事実かも知れないが、無い。そうであれば、必然的に後者の選択が、私の思案として最も適切なものとなるであろうことは、全く当然の如くであった。……だが、仮にそれを私の考慮の範疇に措定したとして、それは全く理路として当然のことであろうが、同時にそれは全くの妄語にも、荒誕不稽にも思われた。何故か。当然であろう。我々人間は陸の生物であり、陸に於いてのみ、生を享受するに能う存在である。つまり、人間は……少なくとも私の浅学の内に於いては……空に舞う、白雪の如き存在ではないのだ。……しかし、全くの無謬を以て、女は……私の眼前に存する女は、白雲の如く、中空を浮漂し、浮揚し、軽浮しつつ、其処に確かに在るのであった。私の違和の念は、正しくそれに端を発していた。……人間は、空に在らない。だが、現に、私の眼前に、浮く女が在る。……これは一体……。

人間、己が夢幻の内に在るか否か、という極めて遠大深遠なる問いの前にては、頬を抓(つね)る、という方途で、その解を得ようとする嫌いがあるようだ。……私は頬を抓った。……頬には鋭痛が走り、この状況が、正に現にて生起したものである、ということを思い知らされる。人間は、宙に浮かない。……しかし、人間は、ある存在へと転化すれば、宙を漂泊するに足る者となる。……だが、それはあくまでも俗説の一つとして人々に信じられ、実際にそうであるかは、不明のことである。しかし、現実に見た以上、私は、この様に結論せざるを得なかった。

この女は、幽霊である、と。

私は身を起こし、頬を再び抓った。……痛い。やはり、現実、か。

その後、部屋の扉が突如として開かれた。母である。覚醒と惰眠の間に在り、忘失していたが、既に時は昼食の刻であった。母は私を忙しくその席へ召し出そうと、その取手に手を掛け、次いで力を掛けたのだ。……母の頭上に揺蕩(たゆた)う女のその姿形と、この奇態な光景は、実に奇妙な感興と、矮小故に、形を成さない憂懼(ゆうく)を、私をして起こさしめ、階段を一段、踏み外すこととなった。その後、昼食として用意されていた素麺を啜り、麦茶を呷り、一服つくと、やはり、母の頭頂に、白妙の衣に身を包んだ女が浮遊している様が、全くの具体性を以て私の眼中へと呈されるに、半ば辟易となる。……そういえば、母には全くこの女の貌が、認識されていない様に思われる。……私にしか、この女は見えないのであろうか。物は試しに、母に、女の姿が、或いは、全き見知らぬ女の、その中空に漂う姿が、見えるか、と、問を発した。……もう一度、寝床で

横になることを勧められることとなったが故に、どうやら、私以外には、女の姿は確認され得ない様であった。問を終え、素麺は消え、麦茶が無くなると共に、二階の私室へと戻り、机上に浮かぶ女を、凝視する。服装、顔貌は、以上に述べた所のものであったが、一つ、気に掛かることがあった。……私は、この女に、触れるに能うのであろうか。手を伸ばし、女の、その素足に指を伸ばし……たが、私の示指は女の脚部が、其処に存在しないものであるかの様に、其処が全くの中空であるかの様に、光条の一閃が朦朧の帳を薙ぐかの様に、素通り、擦り抜けていった。……この女には、私は触れられない様だ。確かに、一般的な通念に於いては、幽霊は大抵、不可触の者である。そうであれば、真にこの女は、幽霊、というものであるという蒙昧な確証が、また一つとして増したことになる。歓迎すべきことではなかったが、この女が幽霊である、ということがより瞭然となる程に、私の内に在った憂懼は失せ、その代わりとして晴れの日眼にする様な、その様な躁的な狂乱が、私の内にその頭を擡(もた)げることとなる。

さて、この女が幽霊であるとするならば、所謂、心霊写真というものを、撮影するに能うのではないだろうか。昨今では、微小な光球も映り込むことがあるとされている様だが、またそれも、闡明(せんめい)とするに能うであろうか。私はこの女を写真機の硝子に収め、撮影し、女が写真の像となっていることを験し次第、友人にこれを送信した。そして、何が写っているか、と問うと、私の机上に無造作に、無骨に、繚乱した夥しい品々の数々を列挙したため、どうも、写真に収めたとして、この女は私のみに見られるものである、ということが、確認された。その後、友人に、件の女霊が視認されることを伝え、半ば不審の眼差しを受けたが、墓参りに行くように忠告を受けた。……私の父祖に、果たしてこの様な麗人が在ったのであろうか。私は再び、何処か物憂げで、虚ろな倦怠の様な、その様な生の倦怠に耐えかね、死者と為ったかの様な、女の面輪(おもわ)に眼を向ける。……如何様にも、私はその推断を受容し難かったが、兎も角、翌日に御先祖の終の棲家へと参ることを、決めた。……女は尚も一心に何処かを凝望し、凝視し、或いは散漫に眺め、その気を何処かへと遣っているかの様な、そんな容貌を浮かべ、そして浮かんでいる。私は、女に誰何(すいか)したが、女は我知らず、と、尚も一心に何処かを凝望し、凝視し、或いは散漫に眺め、その気を何処かへと遣っているかの様な、そんな容貌を浮かべ、そして浮かんでいた。……此方からの問は、女の在る彼岸へと、伝達され得ない、ということであろうか。または、此方の存在を、女は認識するに能わない、ということであろうか。その時分、既に黄昏と暗夜の境であったが、女が消亡する気配も、溶暗する澎湃(ほうはい)も、煙滅する様子も、全く見受けられなかった。私には、全くと言って良い程、靈感なるものが無い。それが故に、霊的な事象には、これに至るまで、全く経験が無かったが、件の友人から伝え聞いた所によれば、霊というものは、突然見える様にも、なる様である。だが、それは大抵の場合、不時にして去るものであろう。即ち、朝には幽鬼を囑目するに能ったが、夕には幽鬼が消散し、何をも見られなかった、という様に。しかし、私は、そうっていない。……往々にして、この様な場合、それから導出される結句というものは、こう、なるのであろう。……つまり、私はこの女に憑かれた、と。……取り憑かれることにより、生出されるであろう、所謂、霊障といった類のものは、よく伝え聞かれることではある。……未だ、私の身には起こっていなかったが……。兎も角、丁度良い機会である、御先祖に顔

を見せることとしよう。そう、私は思案し、一日目を終えたのであった。……………追記せねばならないが、幽霊は、光らないらしい。少なくとも、私に憑き、中空を揺蕩うこの女は、我々と同じくして、己の身を置く光陽の具合に合わせ、己の姿形を変幻させる様であった。……幽霊が、彼岸のものであるとするならば、此岸に於ける変化に対しては一定の状態を保ち続ける筈であるが、全く不可思議なものである。

二日目

空調の、凜気を纏った、だが、何処か無機質な涼風が頬を撫で、そして部屋の主を睨め付ける内に、私は眼を醒ました。すると、私の眼前に、良く知りもしない女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。……………依然、状況は変わらず、か。一夜を女と「共寝」し、「後朝」を迎えれば、その全ては夢幻か、或いは幻相と化し、私は日常へと回帰する筈である。……その様な、非常に澹然(たんぜん)とした、浅薄な願意も、また私の内に在ったのであるが、最早それは無残にも、霧散するに至った、という訳だ。あいも変わらず女の容貌は、全く憎らしい程に整っている。……しかし、これ程の美貌を湛える羞花閉月(しゅうかへいげつ)と共に畏日(いじつ)の朝暾(ちょうとん)に浴するのは、悪い気はしない。さて、この日に私は墓へと参ろうと、昨日意志していたのであった。また、同日に私は旅行へと赴こうと予定していた。故に、旅路へ向かう前に、父祖に対晤(たいご)を請おうと、為したのであった。

私の先祖の墓は、とある山中に在る。幾度も訪れている場ではあるが、全く、神聖と不気味が邂逅し、久闊(きゅうかつ)を叙している様な、そんな勿怪(もっけ)立った場だ。余り、訪(とぶら)いたくなどは無かったが、私の眼前にやはり女が軽浮している以上、興は乗らなかったが、来ざるを得なかったのだ。女は、昨日と同様に、白括りの衣にその身を包み、あいも変わらず足のみは裸身であり、白沓(はくとう)をその身に纏うことは終ぞ無かった。私は墓石に水を掛け、線香を立て、瞑目(めいもく)し、手を合わせた。……友人の推断の通りであれば、これにて私の面前から女は消散する筈であるが……………その瞳に、太虚(たいきょ)でも映じているかのような、その様な深淵を覗き見る、虚ろな、事によっては茫漠とした、顔貌。……弔慰が、不足していたのでは無からうか。私は墓石に水を掛け、線香を立て、瞑目し、手を合わせる。……………私の、勘の方が正しかった様である。……出来るのであれば、これで、煙滅し、そしてこの女が私の祖先の内の一人であった、という結尾であれば、良かったのだが。……これから推察するに、女は、別段、私と何らかの関係の在った何者か、ではなく、むしろ、唐突に、突如として、青天に霹靂(へきれき)が舞うが如くに、私に取り憑いた、そういった類の霊であるのだろう。……さて、それは、多分に私に於いては懊惱(おうのう)の物種と成り得るのであった。即ち、この女が私から去る条件が、全き不明のものとなり、またこの女の本色へと迫る方途も、灰燼(かいじん)の暗夜へと失ってしまった、という故にである。これは、女が私に永劫、憑き続ける可能性が存する、ということを暗示している様でもあり、少々であるが、狼狽と鬼胎の念を私に抱かせた。……だが、これ程の沈魚落雁(ちんぎょらくがん)を、生を受くる間、己の眼中に常に捉えられるのは、それ

はそれで良いのでは無いだろうか、と、狼狽は鳥鳴に、鬼胎は期待へと変転し、墓を後にする。では、行こうか、と、女に一声掛けたが、その返事は無い。しかし、女は確かに私に憑いて、共に旅路を行く。一体何故に、この女は私に取り憑くこととなったのだろうか。私には、それが杳(よう)として知れぬことであった。

友人に、余り心配をかけるのは、忍びないことである。私は友人には墓参りをしたら消えた、といった旨の内容を送信し、車へと乗り込む。友人は、よくあることであると納得した様であった。一刻の後、さて、旅情に浸り、水簾(すいれん)の齋(もたら)す清涼に身を窺っていた所、一つ、気が付いたことがある。彼女は、幾ら飛沫が己に飛ぼうとも、その響応(きょうおう)を全く受けない様であった。彼女は、常に一定の体表を保ち、私の五指と同じく、水沫もまた彼女を素通る様である。……昨日のことと、これを考慮するに、おそらく、彼女には、何らかの実体あるものは、干渉するに出来ないであろう。故に、光の影響は受けるが、我々、有形の有情からの介入は、一切受け入れないのではないかと。……等と、思案した矢先に、一驚を喫した。浮揚したと思えば、その次の刹那にて、彼女はしっかりと、その両の素足を、地につけ、立ち、そして歩んでいたのである。……一体、これは、如何様に釈すればよいのであろうか。幽霊は、基本的に、実体を有するものとは、干渉しない、といった仮定は、最早此処にて、実に、脆弱に、懦弱に、潰え去ったのである。つまり、此岸から彼岸へは、何らの干渉も、おそらくは行いうに出来ないものであろうが、彼岸から此岸へは、何らかの形式に於いて干渉が可能であるのだろう。……が、よく眺むれば、彼女は歩いているのではなく、その足を、ただ地へと近付け、歩む様な動作を行い、その肢体を移動させているのみの様であった。……つまり、浮遊しているものであろうか。しかし、彼女の足跡が、地に刻まれていた様にも、思われる。……これは……。……問は、積もるばかりであり、一向にその解を見せようとしていないことのみ、全く明哲にして瞭明のことであった。全く、幽霊というものは、不可思議な者である。というよりも、人間はその生の終末を迎えれば、この様に、二界の覇者と、成り得るのかも知れないが……。

その後、夕食の席にて日読みの酉(とり)が供され、私の家族は良い気分となり、恰も私の前に漂泊する幽鬼が如くに浮かれ、酒乱が如くに騒いでいた。これならば、どの様な問を為したのであれ、おそらく一笑に付されるであろうと、やはり私の眼前を浮漂し、揺蕩っている、件の女が見えないか、問うてみた。……その結果だが、夏の疲れを疑われ、寢床へ入ることを、此度も勧められたため、再び、女が私以外の人間には不可視の者であることが、確認された。……夏の疲れであれば、どれ程良かったことであろうか。私は夏に疲れている訳ではなく、夏に憑かれているのである。……だが、これもまた、歴とした現であるのだ。現実には、「現実的」な何事かしか、起こらぬものである。平時、我々はその様な無意識的な仮定を持って、日々を享受している。だが、それはあくまでも無根拠な一つの確信、即ち、原信憑に過ぎないのだ。我々は、幽霊に取り憑かれる以前に、その様な信念に、夢魔が如くに纏わり付かれ、取り憑かれているのである。しかし、その信念が幾ら強固で堅固な、岩塊の如きものであったとしても、現というものは、全く複雑怪奇な様相を、我々に垣間見せ、あわよくば、その内へと我々を誘(いざな)い、その信念をいとも容易く破碎しようと試みるのだ。我々は平時、その誘いに猶予い、躊躇(ためら)い、逡巡し、そして引き返す。そうせねば、我々の日常性にとっては不都合

であるのであり、時として、それは我々の持つ世界に対する像を一変させ、我々の世界観に膨大 (ぼうだい) な変更を迫ることとなるが故に、である。……だが、時に、幾多の縁によってその道の帰り路は閉ざされ、前へと進まざるを得なくなる。そして、その道の先に居たのが、この、私の前の中空に舞い、地を我々の様に這い、虚空を凝望する佳人であったとするならば……。万の縁が一の事象の因となり、また一の事象が万の縁となる、それが、私の在る世界である。この幽霊もまた、その様にして私の前へと、その姿を現出させたのであろう。一の必然の為せる業か、或いは、万の偶然の為した業か……。何れにせよ、彼女は、私の眼前に存し、在る。それが、厳然として、莊重 (そうちょう) な面持ちを掲げつつ、私の前の現として、呈されるのであった。旅情が、私の内にて去らぬ儘 (まま) に、女は、私を誘う。或いは、更なる、遠き旅路へと……。その様な予感めいたものが、私の心中を領しては離れず、私が瞑目し、意識を迷夢へと追いやるまで、居着き、彼女の開かれた、だが、朧気 (おぼろげ) な視線の先を、私に思わせるのであった。彼女は、明日の朝光の内にも其処に在るのかも知れない。しかし、明日の暁日 (ぎょうじつ) には、私から去るのかも知れない。……私には、それは杳として知れないことだ。だが、彼女の現れた縁、そして彼女が私から去る縁も、おそらく何処かに存するのであろう。……それは、一体、何なのであろうか。……問は、尽きず、二日目を後にすることとなった。

三日目

さて、眼、というものには、古来より様々な表象が纏わり付いている。その一つには、万物を見通すことにより、神、即ちいと高き者の表徴が存し、或いは、眼には精神に於ける最後の鉄桶(てつとう)と為り、その身に襲い来る姦凶(かんきょう)より、己が身を守る役割を担うといった表徴も、存するのである。前者の表象というものは、私にとっては些末であり、特筆して注視すべき点は無かろう。だが、後者には、全く我々、特に、私は、注目せねばならない。目は、古来より、精神的な邪惡に対する防護壁の役割を果たしていた。それは、科学主義の全盛期である現在であっても、霧散した伝統の残滓(ざんし)として、様々に見られることである。例えば、貴方が道に在り、その先からある御仁が此方へと向かい来るとしよう。そして、その輩というのが、明白に魔魅に塗(まみ)れ、宿業をその身に受け、凶逆をその身に纏った様な、その様な人相の者であったと、しよう。すると、半ば前意識的に、貴方は、その御仁から眼を反らし、其方を見ないように、努めることであろう。これを行う所以の一つとして、その人物と余り関係を持ちたくない、という心理機制が働いた、ということは、考えられよう。だが、それは、件の人物が邪な何者かである、という判断を前提としてのことである。つまり、我々は、その人物より逃遁せんが為に、目を逸らした訳ではないのだ。むしろ、憚惡(どうあく)にして醜惡なる何者かを眼中に収め、其処から発せられる何か悪しきものより影響を受けないがために、眼を反らしたのである。即ち、この眼の防御機構なるものは、まず第一として、己にとって悪しきものを、眼中に収めない、ということから端を発している、という命題が述べられるのではないだろうか。よって、何らかの濫惡なる者が視界の内へと闖入(ちんにゅう)した場合、眼の防護というものは、まず以て発効され得ないのではないのであろうか。……では、何故私がこの様な議論をしているのか。……また、その縁も、以下に記さねばならないだろう。

眼が、醒めた。すると、私の眼前に、知らずということはない女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。……それは良い。だが、女のその麗色と佳容を湛えた顔貌が、私の面前に、卑近な距離に在り、そして、その眼に、私の眼の黒檀(こくたん)が、映し出されていた。……いや、これは私の眼の湛える黒ではないのかも知れない。女の眼が映じていた、あの虚ろなる深淵を眺める様な、その様な空谷(くうこく)の暗夜に、私の黒檀は、吞まれたのかも知れない。だが、女は、確かに私をその眼の内へ、捉えていたのだ。私は、驚悸(きょうき)に衝かれ、身を上げた。女の半身を素通る。……幽霊には、時に、邪惡なる者が存する様である。これまでの来し方を通じ、この女がそれであるとは考え難かったが、その想定は、当然為されるべきであった。……何れにせよ、女は、私の、その精神の防護壁を、全く容易く、

逃避し、そして侵入したのである。……何事も起こらぬため、おそらく、この女は所謂、邪霊なる存在では、無いのであろうが。私は、安堵の息を吐きつつ、その身を臥房へと再び横たえる。……女は、これに至るまでは、私の枕下を矯(た)めつ眇(すが)めつ、虚空に専心し、凝視している様であった。しかし、事ここに至り、此度は、私の眼を一心に見つめている。……つまり、この様なことなのであろうと、推察される。……女が私に取り憑き、三日目。女は、漸(ようや)く、私を識るに至ったのであろう。……その様に思案した次の刹那、女は不意に、再び不可視の太虚へと目を遣る。……真に、私を認識するに女は至ったのであろうか。……と、思うと、此方へと目を向ける。……だが、その黒瞳は、私を映じている様ではあるが、やはり、女の常に見据えている何らかの虚無を、その本色として宿している様にも、私には思われる。……女は、机上に、私と相对するかの様に、浮漂し、時折、此方を凝視している。……三日目にして、どうやら私の存在を、女が認知したという見解に、相違は無い様である。

女が、私を認識した、といって、他に特に何が在った、という訳ではなかった。女はあいも変わらず私の周囲を浮漂しては、地に足を付け、歩む素振りを見せる。私は床より這い出し、車賀(しゃが)へと乗り込んだ。その日は、新たに購入した物件の整備をしようと、深山(みやま)に存する山荘へ、赴く予定であったのだ。女も当然の如くにこの状況が当然と、述べられるか否かについての判断は差し控えるが一乗り込み、浮遊する。……これについて、私は一つ、記銘しておかねばなるまい。さて、幽霊というものが、全く現世より離反した何者かであった場合、おそらく、車であれ、何であれ、その様な移動する物体に己の取り憑いた者が乗じた際には、取り憑いた者のみが移動し、そして幽霊はその場へと、扱(さて)置かれることとなろう。だが、そうなのはいいない。……これから推断するに、蓋(けだ)し、幽霊というものは、それ自体として、何らかの現を、認識しているのでは無いだろうか。……例えば、この様な、車内、車外、等の現の事象である。即ち、何らかの内外を識別する能力を、幽鬼は現世にて有しているであろう。……しかし、幽霊は、どれ程堅固な壁であっても、擦り抜けるに能う、といった俗説も聞かれる所ではある。さて、私に取り憑いた麗人の場合、確かに、どの様に鈍重で、重厚な壁であれ、それを透過するに能う様に思われる。少なくとも、凡庸な玄関程度であれば、容易に通り返けられる様であった。……このことから思議すれば、余り幽霊に内や、外等といった概念というのは、無効の、また無可有のものであるのかも知れないが。車内に留まり、漂い、浮いているとはいえ、その車内の中空にて、車駕と同様の速度にて移動しているのであるのかも知れない。……何れにしても、幽霊なるものは、私の思念を、およそ超越した何者かである、ということのみ、私には容易に示されているのである。その様な事柄について一考を構えていた車内だが、女は此方に眼を向けては、彼方へと眼を遣り、彼岸を凝視しては、此岸を凝望していた。つまり、女の視線は彷徨(さまよ)い、流離(さすら)い、漂浪し、その身を一所に留めることが無かったのである。これに至るまで、女は虚空を睨め付け、覗き見るに、一心不乱に専心していた。だが、今となっては、様々なる事象に目を向け、そして、それらの一々を注視している様に思われた。車輪が、空闊(くうかつ)たる眺望を呈する場へと赴き、赤光(しゃっこう)がそれを止める。すると、女は、窓外に一心に眺め入り、決して、その視線の朧を、動じようとはしなかった。……その先には、眼下に呈される街並み、大鳥居、そして……広

遠なる、溟渤 (めいぼつ)。この女は、その虚ろなる瞳にて、一体何を、見ているのであろうか。街並みに在る、人々の生を眺むるか、神聖なる大鳥居に、或いはその済度の縁を求むるか、また、溟渤の茫漠に、その身を投じ、そして……。何れにせよ、女は語らず、私は、ただ憑かれるのみである。……女の、その眼に映じる何かを、私が共に眺め入ることは、おそらく無いのであろう。だが、私は、知りたかった。……知りたかったのだ、それを。……車輪が軋み、鉄塊は、山道を登攀 (とうはん) する。女は、その視線を、おそらく今に至るまでに覗き続けた、あの太虚が如くにまた遷ろわせる。その肢体は、茫漠と、舞い、漂泊し、所を定めない。三日目は、平時の通りに……いや、これまでの二日間と同様「非常」に、終えることとなった。

これは追記であるが、遂に、この憑依生活も三日目を迎えた、ということで、此処に私の体調について述べておかねばならないだろうと思われたが故に、それを此処に記すこととする。大抵の場合、幽霊に憑依されたとされる人間は、その体調を崩し、何らかの病に罹患する様である。例えば、頭痛、悪寒、発熱、といった症状が、主なものであるらしい。しかし、昨今の精神医学に於いては、幽霊も何らかの譫妄 (せんもう) として、理解されるが故に、幽霊に憑かれる、という事態が了解されること自体に於いて、一種の「幽霊病」に罹患している、ということと、為るのかも知れないが……。だが、私は全くの健康であり、またその精神は決して病魔に侵されたものではない。少なくとも、私に取り憑いているのは幽霊であり、それ以外ではないのだ。しかし、その身体の壮健に対して、これは一日目から記録すべきであったのかも知れないが、何処と無く、何処に在ったとしても、寒気立つことが、存するのである。けれども、それは悪寒ではない。ただ、何か清冽にして、この酷暑にては、爽涼にも感ぜられる、何ものかが、私と極めて程近い距離に在り、その結果、私が冷感を覚える、といった具合のものなのである。……さて、これはやはり女が私に憑いているのを縁として、生起した事象、即ち霊障、とでも名状すべき事柄であるのだろうが、別段、私に於いては、これは障害と、厳しく呼称すべきものではなかった。しかし、これが激化する様であれば、私もお祓いといった手段に、出ざるを得ないのかも知れない。……とはいえ、この様な雲鬢 (うんびん) に、再びの死を与えるに、私のこの両の手は、相応しく無いであろうと、思われる。

四日目

眼瞼(がんけん)の緞帳を、重々しく、勿体つけ、上げる。やはり、私の眼前に、最早見知ったと言って良いであろう女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。女は、此方を直視し、そして、否、そのみである。昨日と比して、私を凝視する頻度が多くなったように思われるが、特記すべき事柄が、この四日目に勃興することは、終ぞ無かった。故に、此処に記すべきことは、殆ど皆無である、と言って良いだろう。女が、浮いては沈み、此方を見ては、彼方を覗き、凝望したと思えば、散漫に視線を移ろわせ、といった事を仔細に記述する責務を私が有しなければ、ということでは、あるのだが。しかし、これにて記録を終えるというのは、実に無味乾燥とした、味気ない、他愛なく、興醒めであり、興味も無く、情趣も無く……兎も角として、無聊(ぶりょう)である様に、私には思われる。故に、以下に、私の身に起こっている霊象(れいしょう)―霊障では余りにも物々しいため、この様に名付けた―についての私見を幾らか述べ、四日目の流記(るき)とする。……既に、眼前に件の女が浮漂してから後、四の陽と陰が、交錯し、そして過ぎ去って行ったこととなる。一体、これは何時まで続くのであろうか。

熱と時間

幽霊と相対することとなり、私には、一つ、思う所があった。先日記した私の体調に於ける変化にて、「肌寒い」という記述が存したことは、読者諸賢も御承知のことであろう。だが、それは体内から発せられる警告としての悪寒や、或いは、不気味な何者かに対して平時感ぜられる様な、あの身の凍てつく寒気ではなく、何か、冷たく、それが周囲の熱を、その有りの儘にて、その身に吸引しているかの様な、譬えるとするならば、灼熱の内に於いて、その中心に置かれる氷柱の様な、その様な、肌寒さ、更に述べるのであれば、爽涼の感であるのだ。

大抵、幽霊が取り憑き、何事かを人に及ぼす場合、上記の様に、不気味な寒気を、対象に感覚させるという描写が、国内外の映像や文芸に於いて散見されるが、実の所、いや、私の場合は、そうではないようだ。ただ、私の周囲に冷ややかな何者かが存し、その結果として、私が肌寒く感じられる、という風なのである。即ち、幽霊を認識する、或いは、幽霊に取り憑かれた人間に於いては、その幽霊の持つ、冷熱の影響を受け、肌寒く感じられている、ということなのである。これについて、私見ながら、一つの論考を此処に記しておきたい。

幽霊は、まず何よりも、我々の様に実体を有していない、ということが述べられるだろう。だが、幽霊は全き形而上的な存在という訳ではなく、何らかの方途を以て、形而下の実体に干渉する術を有している存在なのである。これに関して、所謂、西洋伝来の霊肉二元論的に思想を施すとすれば、その方途というのは、正しく、人間の内に於いて霊と肉を繋げる「神」の存在の媒介である、ということとなるのであろう。しかし、私には、死霊と現世との狭間に、神が介在するとは、考え難い、というよりも、確認不可能な事項であるため、この仮説を前提とすることは、私が安易に受容し得ないのである。したがって、洋の西の風ではなく、我々の立つ思想的地盤に強固にその根を張っている、仏教思想に基づいて、この幽霊の存在について幾らかの思案をしたい。まず、仏教に於いて最も重要な概念は、刹那滅、というものである。これは、遍くものは、その姿が一瞬にして滅し、かつ一瞬にして生ずる、というその事物に於ける存在の機構を表したものであるが、これに則って考えれば、全ての存在というものは、刹那にして、汎ゆる事物に、「変転」するのである。例えば、そのものとして事物甲があるとしよう。そして、その事物甲が事物甲である間は、ほんの一瞬であり、事物甲の滅したその次の瞬間、事物甲は事物甲ではなく、事物乙にも、事物丙にも、なるのである。つまり、全てのものは、固定的な実体を有しない、ということだ。これを、件の幽霊に適応すると、人間は、またその存在を幽霊に変転させるに能うのである。即ち、霊肉二元論に於ける霊というものが、幽霊と為るのではなく、人間の存在そのものが変化した、その結果が、幽霊で

ある、ということなのだ。仏教には縁起の思想が存するため、これが発生する縁として、肉体が失われる、死する、ということが考慮され得るが、それは余り、此処では重要ではない、煩瑣な事項である。最も此処で注視しておかねばならないのは、「幽霊は、人間の変化した存在である」というその命題である。つまり、幽霊は、霊魂というものではなく、現に存する人間そのものが、変転した姿である、ということが、重要であるのだ。

では、何故、それが肝要と為るのであろうか。それについては、幽霊と人間が完全に分断された存在である、という前提を阻却し、幽霊と人間が連続した存在である、という仮説を取ることににより発生する、「時間」という観念について幾らかの思念を為せば、明らかとなるであろう。さて、前文の様に、幽霊と人間が完全に分断された、媒介者無しでは成立し得ない別の存在であるという前提を取った場合、其処に時間の観念は存しない。何故ならば、一旦人が死を迎えたその刹那、その人間の時間というものは停止し、或いは消滅し、そして新たに幽霊としての一或いは彷徨える霊魂としての一時間が、刻まれることとなるからである。例えば、私の時間と、貴方の時間、それらは決して共有され得ないだろう。交錯することは在るかも知れないが、基本的には、一人の人間は、一つの時間しか有するに能わないのである。そして、それはそれぞれの人間が、各々別の存在として、独立していることに、起因するのである。幽霊もまた、同じことである。人間が死を迎え、そして幽霊と為る。霊肉二元論的思考に於いてはその瞬間に人間は、別の存在となり、最早人間存在として有していた連続性は放擲(ほうてき)されているのだ。したがって、霊肉二元論に於いて、生前と死後の間には、連続が存在しないが故に、連続を前提としている時間の観念は、成立しないのである。だが、存在の変転を前提としている仏教思想に於いては、人間と幽霊の間には、連続性が担保され得るのである。それは、存在の無限の転化が保証されているが故であり、また、存在に一定にして常住不変の実体を、認めないからだ。これによって、人間と幽霊の間に連続性が発生するため、時間の観念が生じるのである。

さて、その様に時間を人間と幽霊の間に措定するとして、一体、其処には何が見いだされるのであろうか。それは、私が思うに、死霊の現出に際して生ずる、あの肌寒さの正体である。例えば、私に取り憑いている女を例にとって述べると、彼女の存在した時間というのは、おそらく私が生を受けて以来の時間よりも、遥かに長きものである様に、思われる。幽霊は、その幽霊が死んだ姿から変化を生じない、という描写が、怪奇小説等に於いてよく見られる所であるから、確たることは述べられないが、彼女の纏う、その意匠からして、おそらく今より数十年前に、亡くなった人物であるように、私には見受けられる。此処から述べられることは、彼女の存在した時間が、遥かに私の生などよりも長大である、ということである。そして、この「私の存在した時間より、彼女の存在した時間の方が、長い」ということが、全く興味深い仮説を私に呈してくれるのである。それは、存在した長さの長短によって、その存在の「熱」というものが決定されるのではないか、というものだ。悠久の時を経た彫像、或いは屍体は、全く冷たく、それに対し、生の鼓動を湛える我々人間は熱く、活動期に在る火山は、それこそ全てを溶解させるほどの灼熱を、その身に纏うのである。丁度、硬化時の石膏というものが非常な熱を有するのに対し、硬化後の石膏が冷徹を半永久的に有するのと、若い人間の体温が高く、老人の体温が低いのと、同じことである。今に至る迄、熱は、運動の関数であり、運

動によって熱が、熱によって運動が、それぞれ生じるものであると見做されてきた。その様な前提から、我々の存在するこの宇宙に於いて、いつか秩序の壊乱が招かれるであろうことを、人間は予測していた。しかし、熱が、この仮説の通りに、時間の関数であり、またそれが時計の進むことによって逡減(ていげん)される、或いは、時間に比例して冷熱が増す関数であった、という前提を取った場合、全ての終焉には、永遠なる静止が待っている様に、考えられるのである。また、運動というものも、畢竟(ひっきょう)時間の関数であるが故に、熱は時間の関数である、と述べることも、おそらく可能であろうと思われる。

……いやに、話が大事になってしまった様だ。幽霊と共に在ると、何故、寒気を感じるのでしょうか、というのが、問の端緒であった。その問に対する解は、幽霊が、人間よりも、永き時を経て、存在しているからではないか、ということとなるであろう。……私には、此度、創発したこの憶説が、様々なる可能性を有している様に、思われるのであるが、どうだろうか。

五日目

陽光が、眼瞼の晦冥を越え、炯々(けいけい)と夢幻を見つめていた私の眼窩に、射し込むのが、分かる。……朝、なのだろう。私は、醒覚(せいかく)した。やはり、私の眼前に、見知ったが、余り知らぬ女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。相も変わらず、爽涼な冷気が、女から感得されたが、おそらく、既に、私はそれに浸り、浸り続け、そして終にはそれに久闊を叙せるが如くに馴事(なれごと)となったかの様である。さて、その様な些事は、至極今の私にとってはどうでも良い戯言であった。五日目にして、ようやくこの暗晦(あんかい)に一つの潯標(みおつくし)が立てられたかも知れないのだ。何と、私に於いても、全く、今日のこの出来事は半ば信じ半ば疑える程であり、信ずるに能わない程のことであった。……女と、この五日目を以て、意志を通ずるに能ったかも、知れない。

ことの始まりはこうであった。この記録には、一日目からさして重要なことではないように思われたため、記述していなかったのであるが、私は、睡郷から現へと還り着くと共に、眼窩を重々しく、重鈍に、莊重に、嚴肅に、或いは、夢見心地で、開くと、女に一つ、挨拶めいた何事かの言語群を、今まで擲(なげう)っていたのだ。挨拶めいた何事か、と記述したのは、挨拶というものは、阿と吽との一雙(いっそう)に於いて成されるものであるからである。私の場合、女の返答など、余り想望してなど、いなかった。というのも、今に至る迄、女は私を認識するには至った様ではあったが、しかし、それまでであったが故だ。また、これは実話を語った一或いは、騙った一文芸作品や映像作品に見られることではあったが、幽霊というものは、彼方から我々を畏怖させ、恐怖させ、戦慄させることによって、此方に干渉することはある。然れども、それらの作品から同じく察するに、此方から会話を行う等の干渉は、一部の特殊な人間の類別を除いては、不可能である、ということがあるのかも知れない、という私の憶念も、女からの回申を、私に期待させなかったのだ。……だが、現というものは、やはり人の想像を超越した全く遥かに奇なるものであるらしい。私は、おはよう、と、女に、或いは、己に、虚空に、全き何ものをも存せぬ空に、言葉を投げ、放った。そして、その言葉は、やがてその姿形を喪失し、再び無へと、帰するものと思われていた。……往時、女は、私を通じて、平時と変わらず虚空を凝視していた。……そして、頷く。……いや、彼女が頷いたのか、否かについて、私は言明するに能わなかった。ただ、女の頭が何の意味も持たず、空虚に振るわれたのかも知れなければ、女が単に頭を振りたかったのかも知れず、そうではなく、己に纏わりつく何かを、倦怠を、或いは死を、己の存するという事実を、振り払い、遍く存在物から逃れさりとなく、己の頭蓋を上下に振るったのかも知れず、さりとて、以上のどれでも無く、私の独言に近い辞儀に、応えたのかも知れない。……

私は、惑乱と驚嘆の狭間に在った。幽霊と、意を交わすということなど、あの何やら奇妙で、胡散臭く、勿怪じみた、しかし、何処か威厳を漂わせる霊媒の如き者にしか為せないことであろう。……しかし、私は、その様な者ではなかった。私は、単に何の因果によってかは知らないが、幽霊を見るに能ってしまった人間である。……けれども、或いは……。女は、確かに私の存在を知覚している。……そうであるのならば、女の認識の深度なるものが進行し、私の言語をも、認識するに能ったのではないだろうか。……今迄の四日間を見るに、女は、時を経ると共に、私の存在を認知していった。……一体如何様な構造によってそれが為されているのか、私の与り知る所では無かったが、兎も角、女が、私と意志の疎通が可能であるのか、確かめる必要があった。私は瞑目し、息吹を整復し、開眼すると、私の言葉が分かるか、と女に問うた。……女は再び、此方を凝望しつつ、天を仰望し、地を匍匐するかの様に頷いた。……なるほど、私は、どうやら、人間の想念を越え出でた領域へと、足を踏み入れようとしているらしい。私は、正に、現に、在る様だ。

女は、私の眼前を浮漂しつつ、中空の内に留まり、無動の姿勢を維持している。……私は、女の双眸(そうぼう)に見入った。女の双眼は、最早、太虚も、雲外も、虚空も、虚ろも、深淵も、中空も、中霄(ちゅうそう)も、何をも、捉えていなかった。……ただ、女は、その眼中に、私の両の酔眼を、捉えていたのだ。……私は、女を見ていた。……女も、同様に、私を見るようになった、ということか。女は、今に至る迄、何処かを、一心に、見詰めていた。……私には、そう思われたのだ。……だが、それは彼女のその眼に何ものをも映じなかったが故であるのかも知れない。つまり、彼女は、私が彼女を見るに至ってから、刻々と、様々なるものを、認識したのかも知れない、ということだが……これについては、私には不明のことである。私は彼女ではない。故に、彼女の知覚は、私には分からない。論無く灼然たることであろう。しかし、彼女が真に私を識るに至ったであろう今、私は、こう、彼女に言わねばならない。はじめまして、と。私は、言を発した。……女が頷くことは、無かった。……女が頭を振るったのは、全くの偶(たま)さかのことであったのであろうか。……女は、やはり平時と同じく、何をも在らぬ中空に一心に眼を向け、それきりであった。……幽霊、であるから、このような事象が存在するのか、私の知る所ではない。が、私には、こう思われた。……もしかすると、女は、疲れてしまった、のではないだろうか。……問が、尽きることは、この女が私の前に在る限り、おそらく無いらしい。

さて、女は、それからというものの、私が太陰の終焉に眼を閉じるまで、やはり何処かへと目を向け、凝視し、凝視し、いや、或いは、何をもその眼中に在らぬ、と、散漫に臚を眺めでもするかの様に、中空を漂っては、地を這っていた。……私の言に応えたのは、全くの偶然であったのか、または彼女の気紛れか、何れにせよ、後日、更なる検証を行う必要があると思われた。……だが、もしも、彼女に、真に私の音声及び、そして彼女がそれに応えていたとするのであれば、あの女には、まず私の姿が見え、そして私の声が聞こえた、ということとなる。……これは、一体どういった現象であるのだろうか。まず、私の思案の内に在ったのは、全くの形而下に於ける両要素の相違点であった。光速は、音速よりも非常に迅速なものであることは、良く知られ、人口に膾炙(かいしや)する所のものである。幽霊に於いても、それが例外ではなく、故に、私の姿形が、彼女に

於いてまず初めに呈されたのではないか、という憶説が、一つである。或いは、音というものは、光の劣化したものである、という命題を掲げた厚大な記述を、眼にしたことがある。この命題がそのまま適用され、光が女の一もし在るとすれば、の話ではあるが一感官により精強に訴求し、それに比して微弱であろう音が、その後に彼女に知覚されたのではないか、という憶説も一つである。……しかし、此処に於いて問題となるのは、女は、私の声というものを、私から発せられる音素群を、そもそも聴聞しているのだろうか、ということである。女が、私の如くに、聴覚器を用いて音を知覚している、とは、考え難い。幽霊は、全き形而上の存在ではないが、しかし、全き形而下の存在ではないだろう。そして、幽霊は私の様に、鈍く、重く、指示を聞いては怠惰に安眠を貪る様なこの肉塊を、有してはいないのだ。……私の声が、女に、私と同じ様に聞かれるとは、私には到底思われなかった。それが故に、私に於いては、先に列挙した二つの憶念の、その何方もが誤謬の様に、思われるのである。けれども、そうであるとすれば、女は、一体、何を以て、私に二の句を、その頭蓋にて告げるに至ったのであろうか。……言葉ではない。……いや、言葉ではあるのかも知れないが、しかし、音声ではない。……或いは、言葉に載せられた、私の思念そのものに、応えたのだろうか。……解は得られず、思念は逡巡し、袋小路を堂々と巡り廻る。……驚嘆と、思量に、些か草臥れてしまった様である。私室の照明を消し、おやすみ、と言った。……女が此方に眼を向け、頷いた様に、思えたが、これは私の欲が故のことであろう。……この様な暗夜の幽闇に在っては、彼女が、見えない。五日目を、これにて終える。

六日目

邯鄲 (かんたん) の微睡 (まどろ) みから目覚め、離床し、天を仰ぐ。やはり、私の眼前に、これから見知るに能うであろう女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。女は、白妙を何処とも知れずに吹く息吹に靡 (なび) かせている。……風は、形而下の存在であり、現象であるが、何故、この女に吹き付けるに能うのであろうか。……今に至る迄、女に干渉出来る形而下の現象として、光条が在ったが、しかし、風は……。いや、或いは、昨日、私は声音を以て、女と意を交わすに能った一と思われた一のであった。……即ち、女が存在を認識している時間の増加と共に、女に干渉するに能う形而下の存在が、増しているのではないか。その端緒は光であった。そして、現在に至っては、音である。この様な推断を前提とするのであれば、何時の日か、私は、彼女に触れるに能うのであろうか。……幽霊に触れた、という話は、余り聴くに及ぶ所では無いが、だが、世には鉄塊を以て男の頭蓋を破碎する、その様な女霊も在る、ということは、拙劣一と、私には思われる一な映像作品の教える所ではある。慮外ではあるが、触れるに能う幽霊、という者が存したとして、別段、奇矯の念を抱くに値するものでは、無かろう。……けれども、触れられる幽霊、或いはそういった存在が真に在るのであるとすれば、一体、何を以て、人は、生人と死人を、分節するに能うのであろうか。生死の事実であらうか、その体表の熱度を以てであらうか、或いは、或いは……弁別など、するに能わないのであろうか。……問は、思念の平滑にその足を取られ、己の身を定位出来ずに、其処に在った。何れにせよ、この問は、些末で、些細で、私にとって見れば、惑乱と渾沌 (こんとん) のみを齎すものであった。母の、昼食の席へと、私を召し出す大音声が、私のその下らぬ思惟に一条の亀裂を生じさせる。……さて、今日は、何を為そうか。

用意された昼食を、拙速に摂取し、私室へと戻り、五十音表を新紙に作成する。そして、その上に黒鉛を擦り付け、はい、と、いいえ、という欄を書き込む。私の考えというのは、こうであった。昨日の一連の椿事 (ちんじ) 一或いは珍事一により、私は凶らずも、女と「言葉」を以て、意を通ずるに能った。つまり、女は、私から発せられる幾多の言語というものを、解するに能った、ということを、この事実は意味しているのである。その方途というのは、未だ全くもって不明のものであるが、しかし、彼女がおそらく私と同様の言語の使用者である、ということは、おそらく言うに能うことであらうと、私は思う。だが、女の相好 (そうごう) から察するに、おそらく、異国の言語には、余り明るくない時分の亡人なのであろう様に思われる。故に、英字を用いず、此度は、日本語の五十音表を、一つ、拵えたのである。何故、この様な面倒を為し、彼女自身の言を、その口から聞かぬのか、そう思われる向きもあろう。とはいえ、これにも幾らかの所以はあ

るのだ。女に、先程、話せるか、と、問うてみた所、彼女はその頭を横に振った。異郷の地に於いては、これは肯んずることを意味しているが、当地に於いて、これは否定の意を、表明するものである。このことから、おそらく、女は、私と同じくは、音素を以て、意志の疎通をするに能わない、ということとなると、私には思われた。また、昨日の仮説に於いて述べたことであるが、幽霊が、よりその感官に於いて明瞭に捉えられるものというのは、どうやら、何の故かは私の知らぬ所ではあるが、光輝である様だった。故に、彼女から容易に返答を得るためには、蓋し五十音表という視覚情報を用いた対話を為すのが、最良であると、私は論結したのである。そうして、作成したのが、この五十音表、という訳である。彼女に、此方へと来る様に、言を擲つと、浮き、漂い、或いは、中空の何処かに地維でも存するかの様に沁(すべ)りつつ、私の眼前にて、此方を凝視するのであった。……麗人から熱烈な凝望を受ける、というのは、実に気の良いことではあったが、何か此方が抑圧される様な気が、しないでもない。

私は彼女に、再び、言葉が分かるか、と問うた。彼女は頭を縦に振るった。私と母語を同じくする者であり、また、それと同時に此方の音声を認知するに能う、という事実が確認される。さて、此処からが、本題である。私は、これが見えるか、と、手ずから為した五十音表を指し示した。彼女は再び、肯いの意を表した。次に私は、これを用いて、対話をしたいが、出来るか、と、彼女に問うた。女はその身を少々浮揚させつつ、縦に、その頭を振るう。女に、私の問に答えるに能う際には私が筆を以て指し示す、はい、で頷くこと、そうでない場合はいいえで頷くこと、そしてその答えの具なる所については、あ、から順に私が筆先を以て指し示していくので、該当する文字で頷くこと、という規則を一通り彼女に伝える。では、始めよう、と、私は、女との、奇妙で、奇天烈な、全く私の知の領外に存する対談を開始するのであった。

私は先ず、彼女が幽霊の類の者であるか、と、問うた。女はそれに対して、はい、にも、いいえ、にも頷かず、只管に、私の酔眼を透徹したその瞳目(どうもく)にて、凝視するのみであった。……彼女は、己が死している、という事実が、或いは、幽霊には、幽霊という存在に己が為った、ということが、諒解(りょうかい)され得ない、ということであるのだろうか。分からないのか、と女に問うと、此度は、はい、に頷く。……やはり、己の存在が、一体如何様なものであるのか、女にとっては不分明のものであるらしい。……さて、これはどうでも良い、煩瑣な問である。私はそれに続いて、女に年齢について問おうとしたが、数字を記載し忘れていたことに気が付き、筆を加える。改めて問うと、女は、此方に、少々ではあるが……いや、これは私の気の所為であるといえば、そうなのかも知れないし、そうではないのかも知れないが……批難と侮蔑、そして憤慨が、混雑したかの様な視線を、受けた気が、しないでもない。……兎も角、この問は早々に終え、彼女にその出自を問う。……彼女は、いいえ、に頭を振った。……己に関する情報が、彼女から失われているのか、或いは、単に女が述べたくない、ということであるのか、それとも、私にのみ、知られたくない、という私秘的な態度を指し示すものであるのか……が、何れにせよ、彼女は己が生を享受した地を、知らぬ様であった。次に、私は、彼女に、貴女の名前は分かるか、と問うた。彼女は、肯んじた。筆先を一つ、一つ、滑らせ、一文字目の筆は「り」で止まり、二文字目には「え」で留まった。つまり、「りえ」

と、彼女は述べたのであろう。名を問い、彼女はその様に答えた。りえ……リエ、か。理恵か、理絵か、梨衣か、利恵か、梨絵か、理江か、梨恵か、里英か、里枝か、莉枝か、利枝か、或いは莉恵か、李依か……。彼女の名は、彼女自身、知らぬ様であった。故に、私に了解されたのは、彼女が「リエ」という名である、ということのみであった。先の己の出身を知らぬ様子と、名字の分からぬ様子を見ると、おそらく彼女から、生前のことについての記憶が、幾らか忘失か、或いは遺失されている様に思われる。それが何を意味するのか、私の知る所ではない。しかし、死者というものは、その死した際の姿にて顕現する、というのは、よく聞く風聞である。そして、死に関する記憶が、全き失われている、ということも、同時に良く聞かれることだ。と、するならば、彼女は、夏に、己の生地にて、何らかの、己の家に関する出来事によって、その息吹を絶やし、その結果として、私の前に、その美しい姿形を、現したのではないか、という憶説は、思案されるが、しかし、所詮、憶念は憶念でしかない。……彼女の名が、リエである。そして、月白の衣をその身に纏った美姫(びき)である、ということ以外、私は、彼女について、何も知らない。だが、彼女の名を、私は知った。そのみに於いても、この浮漂し、漂泊する、この尤物が、近しい者に、感ぜられた。……或いは、私が単に、そう思いたいだけである、とも、言い得るのであるが。リエ、と、私は言った。彼女は此方にその眼差しを向け、しかし、それのみであった。

六日目にして、私は彼女の名を知った。追記であるが、以前から感じられていたあの爽涼な凜気が、殆ど無くなった。私がそれに慣れ果てたことによってであろうか、または、彼女が、私に少々、馴染みを深めたのであろうか。分からないが、その何方でもある様に思われる。或いは……いや、幾ばくの思惟を為すことも、無かろう。この記述にて、六日目の幕を、私は閉じることとする。

七日目

夏蘭(なつたけなわ)の極暑が、私の身を灼き、私の内の湿潤を篡奪(さんだつ)せんとする炎昼に於いて、私の眼は覚まされた。やはり、私の眼前に、見知った女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。私の眼前にリエが浮遊してからというもの、一週間の時が刻まれ、ついに昨日、私は彼女の名を知る所となった。しかし、それは彼女の存在の一片をも、私が承知し得たことにはならないだろう。或いは、名のみであれ知り得たことを、幸福と悟るのが、足る者としての努めなのかも、知れないが。私は離床してからというもの、蒼天の茫漠の内に呆けており、リエに、何が故に、君は死したのか、と問うてしまった。……彼女の心中を思い遣れば、この問をすべきではなかったことは、容易に領会されることではあった。……が、寝ぼけ眼とその悪口はそれを、為してしまった。言語に定まった形象は存しないが、そうであるが故に、滅し難いものでもある。……彼女はその身を太虚の一点に、刹那の内にのみ留めると、それきり、虚空を見詰め、此方からの問には、何らの応答も為すことはなくなってしまった。……迂闊であった。私の、失態だ。私は詫び、謝し、己の罪業を贖(あがな)おうと、この七日目の昼夜を費やすこととなった。……結果として、その玲瓏な眼差しは、再び私を捉えることとなったため、私は安堵の息をついている。さて、その様な訳で、本日は記述するに、私の謝罪の言辞のみとなってしまう。しかし、それでは余りにも詮無いことだ。私も慙愧(ざんき)の念に耐えない。……このため、丁度彼女が現れてより七日の時日が経った、ということで、本日の記録は、彼女についての、或いは幽霊と呼称されるもの一般についての、私の憶説を、此処につらつらと連ね、綴り、それを以て七日目の流記と為そうと思うのである。……余り序句が長くなろうとも、倦むばかりだ。では、早速始めることとしよう。

幽霊とは何か

改めて、私は此処に問うておかねばならないことがある。

幽霊とは、一体何であるのだろうか。

この問に正確な解を呈する人間はそう多く無いだろう。私も、この問に答えを与えるとなると、おそらく息が詰まるであろうように思われる。大半の人間は、死者の怨念、或いは、残留した思念、死者が未練を果たすために得た姿、霊魂、という極めて穏当と思われる定義を各々、異なる口であるが、殆ど同じ音として発することであろう。無論、この問に正解など、おそらく存在しない。何しろ、科学全盛期の時代である。疑似科学を科学的に考えると銘打った明治大学科学コミュニケーション研究所の Gijika.com というサイトに於いて、幽霊に関する言説の客観性は E、即ち最低である、と評されていた。この問に、客観的な正当性を持った答えなど、存しないと言って良い。いや、それ程までに不分明な領域であるのだ、とも言い得る。兎も角、我々の人口には、所謂「あの世」の話がよく膾炙する訳だが、我々の内の誰一人をも、幽霊とは何か、という問いには確たる答えを持っていない、ということは、取り敢えずの所、言える筈である。

では、試しにある程度の文化的な正当性は有すると思われる辞書を引いてみて、幽霊の定義を確認してみよう。因みに、私が参照したのは精選版日本国語大辞典だ。

「①死者の霊魂。亡魂。

②死者が成仏できないで、この世に現わすという姿。また、妖怪。おばけ。

③八朔に白無垢を着た遊女を②に見立てていう。

④実際は存在しないのに、あるように見せかけたものをいう語。「幽霊会社」「幽霊人口」など。」

なるほど、存在するか否かも分からぬものについて、よく纏められたものである。この内、定義①、②が私の思索対象である幽霊の定義であり、③、④は現実に於ける幽霊という語の比喩から派生した意味である、と言って良いだろう。故に、私はこれから以下に定義①、②についての幾らかの記述を為そうと思うが、特に、問題の所在が明白に、ありありと、歴々とした形で呈されているのは、定義①である。この定義について、私は賛意を表することが出来ない。と、いうのも、一つには幽霊という未確認であり、全くの未知である存在を、これもまた未確認であり、全くの未知である存在として、我々に知られる「霊魂」という概念一ただし、その重さは1オンスであることが何故かよく知られている一で説明するのは如何なものかと思われる、ということもその縁の一つであるが、私は寧ろ、その根底に息づいている、人間は、魂と肉体が一体となって成立している存在であり、両者は分割可能である、とする霊肉二元論的な思想を以て幽霊というものを理解しようとする、その態度について、少々の反感を抱いているのである。それ

は、何故か。霊肉二元論に於いて、霊とは何であろうか。私の知り得る限りに於いては、デカルトという霊肉二元論を实によく推し進めた近代の哲学者の言に於いては、それは肉体の主であり、単なる延長実体—現実—に存するというもののみの一肉体を操作するものであった、と記憶している。しかし、これでは十分ではない。デカルトが、別段霊肉二元論の初の提唱者という訳ではないのだ。それよりも、肉体を魂の牢獄であると見做し、其処からの「脱獄」を図ろうとした西洋哲学の祖であるプラトーンに眼を向けた方が良いだろう。彼の定義も、デカルトと殆ど同様のものではあるが、しかし、彼の場合は、一層デカルトよりも理想的な、曰く、それは不滅不変な事物の真の姿である、というものであった。私は、この様な定義に於いて、現実—に存する幽霊の、その「真の」姿を捉えることは、到底不可能であり、実に難儀で、困難なことである様に思うのである。私の前に現れたリエ、という幽霊のことを、今に至る迄記述してきた。そして、その内に於いて、私は彼女の姿を「生前に於けるある一時点の姿か、或いは、彼女がその生を失った、正にその刹那の相貌」であるのではないかと述べたと思われる。或いは、述べてないかも知れないが。しかし、その記述の有無は全くの些事である。此処に於いて眼を注がねばならないのは、彼女が、別段、赤子の姿にて、私の眼前に現れた訳ではない、ということだ。プラトーンの定義に於ける靈魂の定義は、常住不変という所のものであった。つまり、彼の定義に於いて、魂—というものは、一切の変化をしてはならないのだ。しかし、人間、生をこの茶番に享受してからというものの、変化し続け、一瞬たりとも、その姿を留めることはない。そして、私に憑いた幽霊は、正に、その「変化した」姿で、私の面前に、姿を現したのである。故に、靈魂、即ち幽霊、という定義について、私はこの点に於いて、異議を唱えたいのである。また、外界の光や風、そして私の言葉等の音に、その身を反応させる点に於いても、全くの完全態であるアイデアの如き靈魂は、幽霊ではない、ということが言えよう。それ自身として完全であるのなら、他の何ものからをも、何らの影響も受けないだろう。それが、形而上、或いは絶対、というものである。しかし、幽霊は、必ず形而下に於ける何らかの存在物から、影響を多少なりとも、受ける。したがって、靈魂は、幽霊ではないのだ。

そうであるのなら、幽霊とは、何であろうか。余り答えを急いで出すのは、感心することではない。我々にはまだ辞書に於ける定義②が、その手の内に残されているではないか。この定義②に於いて着目すべき点は、妖怪、おぼけ、は別として、死者が成仏出来ないと、この世に姿を現した存在である、というものである。成仏が出来たか否かについては、私は余り幽霊に關与の有る事項であるとは思わないが、しかし、何らかの思念を持って、現世に在る、という点に於いては、全くその通りではないか、と思われるのである。幾多の怪談を参照しても、その様であったし、また、私の前に現れた件の彼女も、何らかの思念を持って、この現世に留まっている様に、私には見える。肝心の、此岸に留まっている所以—というのは、私には一向に知られないのだが。或いは、こうも言えるだろう。幽霊—というのは、人が死せる際に、何らかの条件を満たした後、転化した姿なのではないか、と。その条件とは、思うに、亡くなることにより生命活動が停止すること、何らかの未練や怨念等の思念を持って死ぬこと、以上の二つである様に思われる。なるほど、死者が変転し、幽霊となるのであれば、死者が何故、有情としてその生まれた刹那の姿を取るのではなく、様々なる姿—複数の説があるが、未練に応じ

た姿、その人物の最良の姿、或いは、死んだ時の姿、などが挙げられる一で現前するのは、抱え持った未練やその人物が亡くなった際の姿などが条件となっているのではないか、という推理も、また可能となるのである。兎も角、不滅不変の靈魂を幽霊の正体とする言説よりも、死者が様々なる条件によって幽霊と為った、という言説の方が、より私の前に存する現実と、整合する様に、私には思われるのである。

さて、幽霊をその様な存在であるとして、以下には私がリエを観察することによって得た幽霊なる者の性質を述べようと思う。一つには、よく巷間(こうかん)に聞かれる通り、壁は通り抜け、そして中空に漂う、ということである。これについては今までに記述した通りである。また、光や風、そして音等の、形而下に於ける現象の影響を、その程度に差はあれども幾らかは受ける、ということもその性質として挙げられる。また、それらの現象の影響は、ある特定人物に取り憑いてから—この場合は、取り憑く、ということのある人間や存在と共に存在する、ということと定義する。私は幽霊ではないため、この現象については余り明確に定義するに出来ない。全く、不甲斐ない—経過した時間に於いて変化する、ということ、此処に記さねばならない。例えば、ある人物に取り憑いてから、その端緒は光のみの影響を受けたが、時を経るにつれ、音や風の影響を受けるようになった、という様に。或いは、何故かは分からないが、現時点に於いては幽霊が音声を発することは無い、と述べられると思われる。しかし、以上に列挙した幽霊の性質は幽霊一般に適用されるものであるのか、私には測りかねる上、訂正しなければならない可能性も大いにある。その点を、留意しておかねばなるまい。

以上の通り、幽霊とは何か、という問いについて、私が現状に於いて把握している事項を述べたが、余り、幽霊という存在について、正確に記述しているとは、私には到底思えない。……幽霊に関する記述は、丁度、私と言語との関係に、似ている。言語は、私から発せられたその刹那に、私から逃れ去り、意味という残影だけを後に遺し、何処かへと消散する。幽霊に関する記述も、私から発せられたその刹那に、私から逃れ去り、空疎な思索という残滓のみを後に遺し、何処かへと霧散する。……或いは、それが、幽霊という存在なのかも、知れない。

八日目

暗晦の内の漠とした、暈された階調を有した燈火が、私の眼を、眼瞼の帷(とばり)など、恰も幽霊が如くに物ともせず、透過し、刺衝する。……身を起こし、瞼を開けば、窓外には曇天の暗鬱が、憂鬱と懈怠(けたい)に塗れつつ、在った。ふと眼を横に遣れば、やはり、私の眼前に、翳(かげ)りを見せる碧虚(へききょ)の倦怠が伝染したかの様な、女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。終に月から日に至るまでの、七つの曜日を覇し、そして新たなる月に御構の席を、彼女と共に拵えることとなろうとは、思いもしなかったが……。リエは、私のその様な甲斐無き感慨を、全くその澄明な瞳の内へと招き入れず、ただ、平時のとおりに一既に「平時」の通りと述べ得る様になってしまったこと自体、非常に感慨深いが一私の視界に、浮揚しては、また沈降するのであった。さて、時は早くも正午の鐘音を刻もうとしていた。そろそろ、母の呼ぶ声が、聞こえる筈である。……私室の扉に目を移すが、その様子は無い。……今日は、病煩に犯されているのであろうか。これを僥倖とばかりに、私は再び夢幻の揺蕩いに、その身を任じようとし……横臥したが、中空に漂っている筈の、リエの姿が無い。……終に、この時が、来てしまったか。……しかし、その数瞬の後、彼女は何処からともなく、私の眼前へと姿を現す。……何処かへと、赴いていたのであろうか、或いは……。今に至る迄、彼女が私の眼界の外方へと、その浮身を遣ったことは、無かった。……幽霊が、取り憑いた時間の経過によって、ある種の能力を獲得する、あの現象の一例であるのであろうか。それとも……………それとも、私が……その、導因であるのか。……私は、此度にリエと見えるまで、幽鬼の類には、全くの関与を持たず、また見えもしなかった、人間である。その様な人物が、俄にも幽霊と相見えるに能ったとしても……何れ、幽霊を見ることが出来なくなるかも知れない、ということは、思案するに容易であった。……時は既に一週、経っているのだ。……何時、私が彼女を見るに能わなくなったとしても、全くの不可思議である、という訳ではないだろう。霊験は、余り長くは続かない。彼女と共に過ぎ去った日々の中に、彼女は、私の「平時」の、一端を領するものとなっていた。……いや、単に、彼女に愛着が湧いている。私も、覚悟しておかねばならないのかも、知れない……その時まで。

その様な陰鬱を振り払うために、私は車駕に乗り込み、再び山荘の整備へと向かった。彼女は、あいも変わらず浮き、立ち、沈み、驚嘆すべきことに、私の隣の席へ腰掛けた。そして、一心に、車窓から、何事かを凝視している。その姿は、美しくあった。余りに美しく、眩く、婉美で、艶やかで……到底、私が、触れ得ない程に……。彼女の視線の先には、やはり街、鳥居、海、がその姿形を勿体つけつつ、鎮座している。……とりわけ、その内に於いて、彼女は、溟海の茫洋に、その黒瞳を凝着させている様であった。彼女は、

これまでに何度も記述している様に、女性が夏に着用する様な、白妙の衣に、身を包んでいる。その頭顱(とうろ)に麦藁帽でも被れば、それこそ、誰もが振り返り見るであろう和合が、其処には存するのである。私見だが、夏と言え、海だろう。あの海洋の茫漠が、或いは、爽涼な潮風の運ぶ凜気が、我々から暑熱の鬱屈を取り去ってくれるであろうことを希望して、盛夏に海へと赴く人間は、多い様に、私には思われる。……彼女も、その様な内の、一人では無かったのであらうか。これ程までに、熱烈に眼下に広がる海原を凝望しているのである。……少なくとも、何らの関係も無いということは、おそらく無かろう。彼女は、海にて、その生の息吹を絶ったのであらうか。彼女は、生前に、海を好んでいたのであらうか。彼女は、海を望みながら、息を引き取ったのであらうか。或いは、何らの意味を持たず、これもまた無意味なあの水塊に、その眼を遣っているのであらうか。……何れであれ、私に、彼女に関する何事をも推断するに、能わないのだ。……幽霊というものは、生前の未練が果たされたその刹那に、彼岸へと渡り行くと、よく聞かれる。……私は、今に至る迄、彼女と意を通ずるに能ったものの、彼女の、リエの、未練なる、未だ果たされざる願いを、彼女に問うことは無かった。それを、私が聴いてしまえば、彼女が、私の眼前から、去ってしまうような気が、そんな気が、した故に。だが、私が、彼女を後に遣し、去ることなど、考えてもいなかったのだ。……朝旦のあの不可解な、リエの消散。……あれはやはり、私が……幽霊を見るに、彼女を見るに能わなくなっている、その事実を示したものでは無いのか。……そうだとするのであれば、私は……私は、彼女の、その未練を、聞き、そしてそれを可能な限り果たさねばならないだろう。……だが……車駕は、留まることを知らず、ただ山荘へと鉄輪を向かわせる。私の逡巡や躊躇など、極めて煩瑣だと、冷笑でもするが如くに。……彼女の、その透徹した視線が、今では何らかの済度を求める儚きものに、思える。

山荘へと至った私は、前回やり残していた、絨毯を各部屋に敷いていた。彼女は、余りにも広大であり無辺なこの居間の如き一室の天を、心行くままに彷徨っているかの様に、私には思われた。私は、地を這う絨毯に、眼を遣った。彼女を観るに、彼女との、おそらく遠くはないだろう別離に、思いを馳せることになるのが、理解されたからである。……思えば、彼女について、私はその名以外、何も知らないのだ。……死者は、己が死んだ際の姿にて、現れる。この風聞が正しいとするならば、彼女はこの白練(しろねり)を身に纏い、死んだのだろうか。彼女は、自らの名字を、私に名乗らなかった。彼女が忘失した、ということも考えられるが、家に関する何事かについて、想起したくもないが故に、私に伝えなかった、ということも考えられるだろう。……彼女は、ある男と蜜月の関係に在った。しかし、両親は彼らの関係を認めず、彼らは何処かへと出奔し、そして放浪に己等の自由を求めた。だが、その果て無き旅路も、終に残忍な破滅を迎えた。二人の、海への身投げ、という結末によって。或いは、彼女は瘦身である。何らかの病魔に、生前侵されていたとしても、別段不思議のあることでは、無いだろう。……彼女は、ある不治の病に、その身を侵されつつあった。彼女はその相好からして、おそらく、良家の出であらうから、両親は彼女を少しでも生き長らえさせたく思い、彼女を、決して家の外へは、出さなかったのだ。彼女は、おそらく本や、何らかの媒体で、外界の有り様を知ったのだろう。だが、両親は、彼女が外方へと出づることを、決して許そうとはしなかった。結果として、彼女は二十を越える齢まで、生きるに能ったが、病苦の侵蝕

は、その勢止まず、終に彼女は臨終の時を迎える。その時、彼女には、一度もその眼で見るに能わなかった海の、あの無辺際むへんぎわの蒼あおが、想起されたのであった。……以上は、全て、私の想像であり、憶念おくねんに過ぎない。私は、彼女の名を、知るのみであるから。だが、何れにせよ、彼女が、如何様なる生の旅路を辿り、私の眼前に着くに至ったのであれ、私は、彼女の望みを、知らねばならないだろう。そしてそれを、叶えてやらねばならないのだろう。彼女が私の前に現れたのには、何らかの意味が存するのかも知れず、或いは、何らの意味をも存していないのかも知れない。しかし、もしも……もしも、それに意味が有るとするのであれば、私が、彼女の未練みれんを晴らす、ということが、その意であるように、思われるのである。……幸い、と言っいては何だが、私の家は、海より近き所に在る。彼女が、海を見たい、と希こいねがうのであれば、好晴こうせいの蒼天と碧海を、見せてやろうと、思う。絨毯じゅうたんが、敷かれ、作業が終わりを迎える。私が彼女を見るに能わなくなるのが先か、或いは、私が彼女の望みを叶えるのが先か。とはいえ、彼女の望みなど、私には現状、何ら把握はくわくされていない訳であるが。……深山から降る涼気りやうきが、身に纏わり付き……そして私は、山莊さんじやうを後にした。

いざ、彼女から、未練を聞こうと、思い立ったとて、彼女がそれにて消失する可能性を考慮すれば、私は……私は、容易に問うことが、出来なかった。五十音表の上に筆を運んだ所で、どうしても……どうしても、止まってしまう。……今日は、聞くことが、出来なかった。……また後日、彼女に問うてみようと思う。……これにて、八日目の記録を終える。

九日目

気鬱で、陰鬱で、憂鬱で、沈鬱で、暗然とし、鬱屈とし、暗澹であり、重く、鈍重な、その様な朝闇 (あさやみ) の内に、私は眼を醒ました。……やはり、私の眼前に、朧気な女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。……朧気。眼を凝らせば、別段平時と変わらぬ、リエの麗目が、其処には確かに……そうだ、確かに、存したのであった。しかし、私には、刹那ではあるが、今にも彼女が此岸を辞するかの様な、その様な、儚い姿に、見えた。……時間は、余り無いのかも知れない。……だが。身を起こし、私は瞑目する。彼女の未練を、私は聞かねばならない……そうだろう、聞かねばならないのだ。……彼女がもしも未練を果たし、そして私の前から去ったとしても、それは、喜ばしいことなのでは、無いだろうか。……幽霊を見るに能うのは、やはり異常のことであろう。また、彼女が彼岸へと向かうことにより、私は日常性へと回帰出来るだろう。……それは、歓迎すべきことではないだろうか。……出来る訳、無いではないか。どの様な理を後から付したとて、どの様な所以を私が思案したとて……それは、全く空疎なものだ。……曲がりなりにも、私と彼女は、既に八を越えた日々を、共に過ごしているのである。……私は、やはり……彼女との、この日々を、失いたくは無いのだろう。何より、幽霊が見える。この事実が、如何に私の無聊で、無機質な、倦怠と退屈に綾取られた日月に、生を吹き込んだことか。……私は……。眼を、開ける。彼女の姿形が、数瞬、その輪郭を喪失したかの様に、私には見える。……否が応にも、離別の懊悩は、私を訪うものか。……私は、彼女を見た。珍しく、彼女は、私の寝台の隣に、足を地に付け、立っていた。……こうして見ると、一体何が生者と幽霊を分かつか、私には、不分明なものと、思えてくる。……そういえば、数ヶ月前に著した文書が、その様なものであった。……結局、私はこの九日目に於いて、彼女からその生前の、末期の願いを、聞き出すに能わなかった。ただ、己の煩悶が故に。……記録すべきことはない。……書き残すべきではないのだ。代わりに、その数ヶ月前に物した文を、此処に掲載して九日目の記述とする。

幽霊の存在論

貴方の目の前にて、一人の女性が歩いて此方の方に向かって来ることとしよう。……その時、貴方はその向かってくる女性が、幽霊ではないということを、明示的に証するに能うであろうか。私には、甚だこれが難しい問題であるように思われた。何故か。それは、そもそも「幽霊と現実の個物との境界」を思案すればするほど、私にはそれが得体の知れないものと化していったからである。……俄にこの様な突拍子の無い話を投げ掛けられても、おそらく貴方にとっては迷惑千万なことであろう。然らば、経緯を追って、話すことにしよう。

例えば、幽霊の存在を証明するものというのは、おそらく何をも存しない訳ではあるが、その存在を描いているエクリチュール—この場合のエクリチュールとは広い意味で書かれたもの、即ち映画も含む—は、無量に存するものである。一日、私はホラー映画を見ていたのだが、このホラー映画というのが、実にけったいなものであった。というよりも、端的に出来が悪かったのかも知れないが。その内の一場面に於いて、女の幽霊が女子大生の頭を殴打し、張り倒すというものがあった。……其処で、私は思ったのである。……そもそも幽霊といった類のものは、平時は此方からは見られることがおよそ無いものであり、また、現実存在する事物には一切触れられない、という描写はよく見られるものである。しかし、この作品の様に、幽霊が現実の個物に対して干渉可能であるという前提を採用した場合、人間と、この幽霊とを隔てるものとは、一体何なのであるのか、と。この疑念というのがしち厄介な代物で、真夜中の三時まで、私の心中に居着いて離れることは無かった。幽霊は取り憑くものではあるが、私はどうやら幽霊についての思念に、取り憑かれた様である。その際にまず以て思案したのが、冒頭の問いであった。即ち、「眼前にて歩いている女性を、私は幽霊か否か見分けるに能うのであろうか」というものである。では、見分けられるのであろうか、と、言う、実に心もとない。

例えば、目の前の女性が幽霊ならば、幽霊らしい格好をするであろうから、おそらく見分けられるだろう、という意見が有るとする。だが、幽霊らしい格好をする現実の女性も—例えば丑の刻まいるを行う女性—あるいは現実の女性らしい格好をする幽霊も—お好きなアイドルが主演を務める B 級ホラー映画を見れば良い—確かに在るのである。少なくとも、エクリチュールの内では。現実では……私は幽霊に遭遇したことが無いため、分からないが。しかし、以上の縁から、外見でその人が幽霊であるか否かを見分けるのは、大変難儀であると考えられる。幽霊と現実存在との弁別指標として視覚的指標を用いるのは、何れにせよ困難な様だ。

では、その件の女性に貴方は幽霊か、と聞けば良い—良くて貴方は不審者扱いであろうが—という意見が有るとしよう。今度は、その対象自身に証言させようという訳だ。だ

が、これも私にはどうも不十分であるように思われる。私が見たホラー映画の中で自分が死んでいることを自覚していない幽霊というのは多数描かれていたし、何よりも、自己言及のパラドックスという問題がある。これは所謂クレタ人のパラドックスという奴で、ある嘘つきのクレタ人が居るとして、そのクレタ人が自分は嘘つきだと言った時に、生じる例の逆説である。それが本当であれば、嘘つきのクレタ人が（ある意味）正直者となり、それが嘘であれば、クレタ人は嘘つきという命題が嘘ということになって、何れにしても二律背反が導かれるのだ。これは極端な例だが、丁度、件の女性も同じことである。彼女に自分自身について言及をさせたとしても、それは決して明証性を得られない。何故ならば、ある命題の真偽を確定させる際には、それとは別の上位の論理階層を持たねばならないからである。詳しくはラッセルの論理学でも読めば良いと思うが、何より、女性が自分は幽霊では無いと主張したとて、それが真である証拠は無い。従って、女性の証言は、その女性が幽霊であるか否かを弁別する指標とはならない。古代インドに於いても、証言は議論の前提として採用するには最も弱い証拠であることが、チャラカ・サンヒターにて記されている。

ならば、これならばどうか。幽霊は、（おそらく）此方からは触ることが出来ないが、現世の個物には触ることが出来る何某かの存在である、という前提を採用し、その女性に握手を求める、というのは、中々良い案ではないか。貴方が男性であった場合、おそらく最悪の場合は警察沙汰ともなろうが、女性であれば、変人と思われるのみで、どうやら済みそうである。しかし、私の見たホラー映画では、幽霊に触っていたものもあったが……今回に限り、それには目を瞑って、考えるでしょう。これで触れられることが出来れば、件の女性は幽霊ではなく、触れられなければ、件の女性が幽霊である、と結論付けられる。……成程、これは確度が一見すると高い様に思われるが、実際どうであろうか。そもそも、与件として、感覚というものが、論証の前提に値するのであるとか、という疑問を、私は持つ。私が触れた/触れなかったというのは、謂わば一個の私の「感覚」の問題であり、そして感覚は感じられたものであるから、錯覚の様に、我々に虚偽を呈することもある筈である。従って、感覚が我々を欺くという可能性があるが故に、これも幽霊と現実個物との弁別指標としては、採用しかねると、私は思う。それに、私は目の前で歩いている女性を論議の対象としているのである。その女性と握手を求められ、それに応じた女性とは、論議対象として全くの別物であろうように、私には思われる。

……翻って考えてみて、視覚情報としてしか存在しない他者と、幽霊との間には、一体どのような差異があるのであろうか、という別の疑念が、私には湧く。そして、そもそも、他者と幽霊との間、というよりも、一切の現実には存すると思惟される個物存在と、幽霊とでは、一体どのような差異が存するのであろうか、という更に先の疑念を拡大した問いも、同時に私の内には湧き上がるのである。強いて言えば、これは、最早一個の些事などではなく、存在論の問題なのだ。或いは、我々に自明視されている現実性の問題とも言える。それが、冒頭の問いから導き出される問であるように、私には思われた。

十日目

零雨(れいう)が、屋根を篠突き、それから発される鳴動(めいどう)にて、私は覚醒した。褥(しとね)の横を見遣った。やはり、私の眼前に、よく見知った女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。リエは、その身を中天に軽浮させ、此方を凝視していた。……私には、その眼が、己の未練を果たさず、ただ事が行き過ぎるのを安穩(あんのおん)と、呆然と、ただ啞然として待望している愚者を、厳然と裁くかの如きものに、思われたのである。……暫く、彼女の、その玲瓏(れいろう)とした、透徹とした、何処までも澄明な、清澄な……透き通った、その眼を、私は見返していた。……赦してくれ。私を、赦してくれ。……私には、貴女の未練を聞こうという、その意志が、如何にしても、否まれるのだ。……彼女の姿が、霞んで見えた様に思われる。……彼女の背後に存するであろう、あの夥しく無辺際に在る書物群を、私の眼識が捉えた様に、私には思われた。彼女が、透けているのか。元来、幽霊とは半ば透明であるものだと、巷談に於いては語られていたが、彼女もまた、その様な性質を獲得したのであるだろうか。だが、今、彼女を見れば、その相貌は、確かな存在を有するものとして、私の眼に映る。……私の抱く憂懼の見せた、幻影か、幻夢か、或いは、虚妄か。……その次の刹那、彼女の輪郭が、徐々に、不明瞭なものとなっている様に、見える。……いや、実際に、そうなのだ。彼女を構成しているその姿態が、私の眼前にて、溶化するが如くに、中空から霧散しつつあるのだ。……まだ……まだだ。まだ何も、終わっていない。私は、彼女に手を伸ばした。その手は、何にも触れ得ず……数瞬の後、彼女は、その痕跡を何をも遺さず、何処かへと、消えた。……が、その刹那の後、再び彼女は己が消散した太虚の一点にて、姿を現出させる。……おそらく、彼女が、私から去ろうとしている訳ではないのだろう。私が、彼女をその眼にて捉えるに能わなくなっている……ということなのである。……私は、霊を視るという力能を有した人間ではない。全ては偶然の爲した御業である。故に、それが終わるのも、また偶然が手ずから為す範疇に存するものであるのだろう。……何れにせよ、彼女との、離別に近い様に、私には思われる。……私は、彼女の望みを、未だ聴いてすらもない。……これが、彼女との別れであるのだろうか。……真夏の落とした陰影、それが彼女であるとでも、言うのであろうか。……彼女が私の前に現れたことについては、何らかの意図が存しているだろう。或いは、存していないのかも知れないが、その様な憶念、私にとってはどうでも良い。……兎も角、彼女から願いを聞かないことには、何も始まらない。私は、己の負った責を果たさねばならない。

私は、彼女に、何か願いはあるか、と問うた。彼女に、その終局に際して、何かやり残したことは、未練はあるか、とは、私は、問うに能わなかった。……様々な所以が有る

だろうが……これが、彼女との別れである、ということを、私が思念しなくなかったが故、であるのだろう。彼女は、私の眼を覗き込み、凝視し、五十音表に於いて、はい、と答えた。では、何がしたい、と私は彼女に問うた。五十音表を硬筆が慰撫する内に、彼女は、う、と、み、に至った所で、頷いていた。

「うみ」

海、あの茫洋とした、茫漠とした、漠然とした碧虚、海原、紺碧(こんぺき)の存する場所へと、彼女は、赴き、そして見たい、と、そう望んだ、のだろう。やはり、海、か。……窓外を見遣れば、瀧潤(りゅうじゅん)が、地を濡らし、慰め、刻まれた疵口(きずぐち)を癒すかの様に、混凝土の裂開に滴っていた。……明日。……明日、この天水が、降り止めば、彼女を海へと、連れて行こう。……そしてそれが、我々の、束の間ではあったが、同時に悠久に続くかの様に思われた、この永く短き日々の、弥終(いやはて)となるだろう。……十日目の、記録を終わる。

十一日目

柔和な光が、眼瞼の暗幕から、木漏れ日が如くに、射していた。私は、眼を覚ました。窓外を見遣れば、雲霄(うんしょう)の紫煙に暈された陽光が、辺り一帯を溫柔に、照らしていた。……昨日の予報に於いて、今日は、雲翳(うんえい)の続く一日であると、述べられていた。その通り、という訳だ。……天水は、上がった。私は、彼女を……。窓外から私室へと、眼を戻す。やはり、私の眼前に、美しい女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ったのであった。今日で、この「後朝」も、最後のものとなろう。私は身を起こし、リエを凝視した。濡羽の長髪、良く整った、顔貌。透徹した、だがその何処かに虚ろと薄幸、そして儚さを湛えるその眼。彼女に似つかわしい細い首。連なる瘦身。纏わった、月白の衣裳。そして、白妙を抜けたその先には、幽艶な美を湛える足。……彼女は、浮漂していた。彼女は、軽浮していた。彼女は、浮揚していた。彼女は、浮遊していた。彼女は、揺蕩っていた。……彼女は、浮いていた。……私を、凝視していた。だが、その瞳には、平時の通りのあの虚空は、あの激越にも見えた無感動は、宿されていなかった様に、私には思われた。……其処に映じていたのは……おそらく、慰め……であったのかも、知れない。……余り、哀惜に浸り、哀傷を慨嘆しようとも、ただその哀哭は、空谷へと、無意味に残響するのみである。……私には、母以外に、これ程までに長く、生活を共にした女性は居ない。故に、この様に感傷にその身を窶(やつ)しているのかも知れないが……実に、遺憾な事実だ。まあ、良い。……行こう。寝間着より着替え、玄関を開け放つ。……珍しく、彼女が、私よりも先に、外へ出る。それに対し、私は、玄関の扉を越え……其処で立ち止まっていた。……逡巡、しているのだろう。或いは、躊躇いか。……それ程までに、海へと、行きたいのだろうか。……幽霊は、己の未練を果たした末、彼岸へと赴く。……余りにも勁烈(けいれつ)な願いは、やがてそれを願った本人にとって、呪いにも等しいものとなる。……人を呪わば穴二つ、よく言ったものだ。未達の願望は、やがて呪いとなり、主を苛む。そしてそれが果たされず、終に願った主がその息吹を此岸に於いて絶った刹那、願いは、未練という縛鎖と化し、主を此岸へと拘禁する。……その成れの果てが、幽霊、であるのかも知れない。……願いの穿孔、主の空虚。正に、穴は、二つ空けられた、という訳だ。停車場の中空にて、彼女の姿が、不明瞭となる。存在が、滲む。霧消する。その数瞬の後、彼女は再び現前する。……彼女は、幽霊だ。……彼女のその願いを果たし、彼女を、安息と安らぎの最中に彼岸へと渡す。その責任が、私には、ある。……行こう、彼女が、私の視座に在る内に。もう、余り遺された時間は無いのかも知れない。私は銀輪を疾駆させ、海へと向かった。

リエは、常とは違い、宙空にて私の移動に合わせ、その身を移すのではなく、私の後ろに、乗っていた。……地に足を付け、また私と意を通ずるに能う幽霊である。……この様

な芸当は、可能であっても何ら奇異の念を抱くに値しないのであるが、私は、彼女の方を……見るに能わなかった。……無論、運転の最中に振り向くなどという無謀を、私が犯すに能わない、ということも、あった。だが、それ以上に、彼女の顔を、私は、見られなかった。……思えば、十一日の間、様々なことが有った。突として現れ、中空に浮かぶ人間を見た、あの驚愕、私を凝視した彼女に対する少々の一驚、彼女が私の言葉に答えた刹那の驚嘆、彼女と言葉を交わした時の感嘆、そして、彼女を、私が見ることが出来なくなるであろうと、確信した、あの哀切……。様々な、ことが有った。……彼女が何を思案し、何を感じ、そしてどの様な思念を懐き、此処に在るのか。私には、杳として知れぬことであった。……そもそも、私は、彼女の名以外、何をも、彼女を知らないのだから。悲しむべきことであるのかも知れない。……だが、既に、彼女は、亡くなっているのだ。……既に、私の手の内から、零落(れいらく)してしまっているのだ。……其処に在る様に見えても、無いのだ。……丁度、幽霊の、様に。銀輪を進め、赤光に、その歩みを制される。彼女は、私の眼を、覗き込んだ。……全く、美しい、瞳だ。透徹して、透明で、濁り無く、清冽な、清純な、純粹な、澱みなく、澄明な、清澄な、清らかな、澄み切った、玲瓏な……何処までも、何処までも、透き通って……触れられない……その美艷に、その此岸のものとは思えない幽美に、私は圧され、只管に沈黙するしか、能わなかった。出来るならば、彼女を喪いたくなど、無い。しかし、彼女は……この世のもものでは、決して、無いのだ。赤光の光煌が、私を存恤(そんじゅつ)するかの如くに、煌々と、何処か一抹の哀情を閃かせつつ、蒼光へと、その身を変転させる。……あと一つ、信号を越えれば、あの深藍(ふかあい)の存する地へと、辿り着く。銀輪は、前へと進む。私の、迷いを、弱志を、因循(いんじゆん)を、猶予いを、揺蕩いを、彷徨を……薙ぐかの様に。

信号を越え、緩慢な坂道を登ると、公園が視界に入る。その公園は、実に名が体をよく表しており、名を「港の見える丘公園」と言う。朦々たる白雲は、おそらく晴れることが無いだろう。私は、リエと共に、公園の名が記された看板を越え、草臥れた二輪を駐車する。緑草が生息の息吹を漲らせ、一帯を被覆する砂塵は、温熱をその身に纏っていた。曇天のためか、あの炎夏の暑熱は去り、ただ薄暑と、吹き付ける風が、頬を撫で付けては、過ぎ去って行くのみであった。しかし、あいも変わらず、この薄雲に綾取られた雲居ではあったが、鎮座する漆黒の艦船の模造のみ、その身に熱を潜ませている様であった。彼女の輪郭が、霞んで、見える。……時間は無い。私と彼女は、護岸堤の方へ、その歩を進め、そして……蒼の茫漠が、深藍の乾荒原(かんこうげん)が、碧虚が、その内に太虚を有するあの紺碧が……我々の前に、その相貌を、現す。海……海、だ。私は、彼女に、海だ、と、述べた。彼女は何時の間にか、中空の浮漂を止め、私の隣に、地に足を付け、その双脚を以て、立っていた。彼女を包む白妙の衣は、風に揺れ、揺れている。彼女は、生きているのだろうか。……或いは、死んでいるのだろうか。……私には、分からない。溟海(めいかい)の茫洋が、我々の前に呈され、無機質な波消しのみが、此岸の我々と彼岸の青畳(あおだたみ)を分かち。遠海では、黒橡(くろつるばみ)の船影が鈍重な歩を進めている。海風は、ただ只管に、風いでいた。リエを、見る。彼女は、眼前に漠然と、臍氣に展延する群青に、その眼を凝着させていた。……ただ、何かを捉えんがために。ただ、その視座にこの蒼海を刻印せんがために。ただ、己の内に滞留した未練を、願いを、此処に果たさんとでも、するかの様に。……彼女は、あの太虚を凝視して

いた時の様に、一心に、海原を凝望することに専心していた。……これが、彼女の、末期の願いであったのだろうか。……私は、彼女の末練を、果たすに能ったのであろうか。

風が。爽涼な、清新な、清々しい、爽やかな、一陣の風が、一抹の寂しさを孕んで、私と、リエの間を、吹き抜けた。

「ありがとう」

彼女が、言った。いや、私には、その様な気がした、だけなのかも知れない。或いは、私が贗造した、幻聴なのかも知れない。

私は、さよなら、と、言わなかった。さよならを告げるのは、少しだけ死ぬことだ。……彼女は、既に死んでいる。

風が去り、後には、私が残った。……リエは居ない。彼女は、居なくなった。この居なくなった、ということは、単に在らなくなった、ということ、意味しているのではない。彼女は、其処に、無いのだ。既に、其処には、無いのだ。在らなくなった、ということは、存在を前提としている。……無い、とは、存在を前提とはしていない。無いのだ、彼女の、存在が……。風が、風だけが、ただ、吹き、包み、そして、去って行く。……一つだけ、言えることがある。潮風が辛いのは、海塩に依るばかりでは、無い。

結句

あの日からというものの、やはり、私の眼前に、あの美しく、良く見知った女の貌が、全く実にこれもまた物々しく、事によっては勿体をつけつつ、其処に在ることは、最早無くなった。ただ瞼を開けば、生成(きなり)をその身に纏った空虚が、其処に存するのみである。彼女が、彼岸へと、安息し、渡ったのか。或いは、単に私に彼女が見えなくなったのみであって、私の眼前に、平時と一もう平時とは、言えないが一変わらぬ様に、彼女が、其処に居るのか。……彼女を見るに能わなくなった今、私には答えられない間である。ただ、煩熱の鬱屈は、再び私を苛むようになった。……思い返せば、今夏は、死というものに近い夏だった。夏、と言えは溢れんばかりの生の鼓動が躍動する季節であるように思われるが、私には、違った。彼女が私より去ってから二日後の未明、私は、祖父を亡くした。……燦然と、眩い光輝に満ちていた、あの満ちた月の、月影が、未だに、私の記憶には、歴然と想起される。祖父は、持ってあと一週間であると、医者から宣われていた。……仕方のないことであつたのだろう。……さて、この夏、私はもう一つ、実に不可思議な出来事を、経験するに至った。

ことの始まりは、納涼のため、恐怖映像を見ようと思い立ち、ある実録恐怖映像を、映写したことだった。私は、基本的に、こういった実録映像なるものは、恐怖映像という類別に於いては、存在しないものであると、考えていた。……リエの一件があつて以来、心霊現象なるものの存在は確認されたが、しかし、それはそうそう安々と起こり得るものではないが故だ。件の映像は、某地区に於ける鬼門を全て破し、その結果を撮影しよう、という趣旨のものであつた。共に無聊を慰めようと、私と映像を見ていた母は、こんな罰当たりなことをするべきではない、と憤慨していた。その時分には、私は、どうせ企画だろう、と、高を括っていたのだが、母の言は、全く正しいものであつた、と、今にしてみれば、思われる。人間、何らかの禁忌として定められているものを、安易に破ってはならないのだ。映像が進み、某地区の鬼門を尽く破壊しつつ、そして愈々、恐怖の根源たる心霊に相見えん、と、なったその時。……隣室から、何かが落ち、そして地面に衝突した様な、そんな音が、聞こえた。私と母は、すぐさま其処へと赴き、そして慄(おのの)き、戦慄(わなな)き、恐怖した。……硝子瓶が、それも決して割れない様な強度であろう瓶が、割れていた。それも、罅(ひび)が入る、等の割れ方ではない。……破片が四散し、最早跡形もなく、木端微塵の有様であつた。……当初、私は何らかの衝撃によって、高所に置かれていた瓶が地へと落下し、そして現状の様になったのだ、と、考えていた。いや、あの映像が縁であるとは、考慮したくなかったのだ。余りにも異様な割れ方であつたため、現状を追認し難かつたのだろう。だが、母は、瓶は、床に、あのひっくり返った白い盆の上に置いてあつた、と述べた。見れば、確かに天地の逆転した

白盆が、其処に、所在無さげに在った。……全く、世には、不可思議なことが、起こるものである。爆発四散した瓶を片付け、例の映像を停止し、私は恐怖に狼狽し、一夜を明かすこととなった。

さて、後日、これについて考えてみたのだが、全くの自然現象であることは、おそらく無いだろうことを考定の範疇に入れ、四つ程、仮説を思案した。一つ目は、あの映像に出現していた女の霊が、映像を伝って此方へと来訪し、そして瓶を割り、去った、というものである。霊が果たして電気信号を導きの糸として移動するに能うであろうか、という疑念は存するが、私には確認するに能わぬことである。また、鬼門を毀(こぼ)つことにより現出する霊が、瓶を割ったのみで満足し、帰り路に就くのであろうか、といった疑念も、同時に生ずる。以上のために、私は、一つ目の仮説は、おそらく不適當であろうと、思っているのである。次に、二つ目は、私の家におそらく存在しているであろう、神棚に祀られた神が、何らかの危険から我々を遠ざけようとしたがために、瓶を割った、というものだ。私の生家の神棚は、一般的な場所に無い。神棚は、丁度、私が恐怖映像を見ていた受像機の、真上に存するのである。このため、映像を見た際に、何らかの邪なるものが受像機の画面から出現するのを、その真上に存している神が察知し、現前した邪霊を隣室へと追い込み、そしてそれを破し、その象徴的現象として、瓶が割れたのではないか、というのが、この仮説である。彼岸というものは、象徴によって何らかの行為を代替することが多い様に、私には思われる。故に、この仮説は案外、適當であるのかも知れない、と、個人的には考えている。三つ目の仮説は、先の二つ目に類似したものだ。相違点は、私と母を守護したのが、今夏に亡くなった祖父の霊に置き換わっていることのみである。これについても、適當である可能性が高い、と考えている。最後の四つ目の仮説だが、先の一連のリエに関する記述に於いて、私は、幽霊には、憑いた時間の長さに応じて、その能力が獲得される性質があるのではないか、という推理を提示した。この通りに理路を進めるのであれば、実体に触れるに能う、という力能を有した幽霊というのは、非常に長きに亘って、対象に取り憑いていることとなる。したがって、此度の場合には、その様な幽霊が、私か、或いは、母に取り憑いているのではないか、という推断を、為すことが出来る。では、私の母だが、特に何かに取り憑かれている等と、口にした試しはなく、また何かに取り憑かれた様子は今までには見受けられたことが無い。故に、この推断の通りであれば、私に、長きに亘り取り憑いている幽霊が在る、ということとなるだろう。……長きに亘り、取り憑いた幽霊。……それは、彼女なのではないか。あの、月白に身を包んだ、彼女なのではないだろうか。……リエが、何らかの所以によって、隣室の瓶を、尽く破碎したのではないか。私は、四つ目の仮説として、これを、考案するに至った。……だが、この四つ目の臆断が正しい見込は、おそらく、無いだろう。……確かに、あの爽涼な、寂寥を纏った潮風の内に、彼女は、彼岸へと、赴いたのであろうから。

今でも、彼女を、思い出す。あの美しい、艶やかな濡羽の長髪を、透徹した瞳を、美しい顔貌を、瘦身に纏われた白妙を、幽艶な裸足を、今でも、私は思い出す。……もしも、あの世、というものが存するのであれば、彼女は、無事、此岸より三途の川を渡っただろうか。彼女の眼前に広がった三途の川は、さぞ無辺際のことであつたろう。何しろ、あの漠として広大な、溟海であつただろうから。或いは、あの世が無いのであれば、

彼女は、この現の生滅流転を限り無く往還する、輪廻の円環の内へと、回帰するに能ったのであろうか。……何れにせよ、彼女は、私の傍には、もう、居ない。それだけは、容易に分かることである。

……ただ、私は願っている。

彼女に、安らぎが有らんことを。彼女が、安息の内に眠らんことを。彼女が、海原の茫漠の内に於いて、寧静と静穏を得んことを……

私は、願って止まない。



注意

本稿の著作権は全て著者に帰属するものとする。

風に揺れる芒

著 楽尾黒曜

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
